和泉亮
星が残した痛みより
Illustration 鍋島テツヒロ

「ねぇ、アリス」
「なに？」
「貴女のところでメイドをするわ」

星が残した痛みより

プロローグ

「どうして……」

無意識に言葉が零れ落ちる。熱の無い呟きは冬空へと同化するように溶けていった。

中空に消えていった言葉を追うように少女は視線を上げた。

重厚な扉の先には、紅い建物。壁も屋根も紅一色で統一され、昇り始めた朝陽にきらきらと輝いている。

その光景に少女はスっと目を細めた。徐々に瞳に光が戻る。

どんなに呆然としていようとも、十六夜咲夜という性分はどんな時でもすぐに冷静さを取り戻そうとする。

十六夜咲夜。

肩口までの輝く銀髪にふた房の三つ編み。怜悧な容貌は美しいけれど、どこか近づきがたさも内包している。

長袖のブラウスに濃紺のツーピース。頭にちょこんと乗せたヘッドドレスと、小さめのエプロンを付けた姿はメイドを彷彿とさせ、首もとには仕立ての良さそうな栗色のマフラーを巻いている。

目の前にそびえ立つ紅魔館のメイド長。
メイド長〝だった〟少女。
ひゅう、と吹いた寒風にぶるりと一回震えた。
初冬の朝にしてはひどく刺すような冷気。自然と首を竦め、マフラーに口元を埋める。
「どうして」
もう一度呟く。今度は先程よりかはいくぶん力が篭もっていた。
戻った意識と言葉が時間を遡らせる。
追憶するように。眩しかった日々を思い出すように。
どうして――

「私は紅魔館を追い出されたのだろう――」

◇

紅魔館の廊下をひた走る。
優雅に。軽やかに。
タッタッタ――小気味良いリズムを刻んでいるものの、毛足の長い絨毯がその音を吸い込んでゆく。

やかましくもなく、慌ただしくも見えないのは少女が備えた優美な振る舞いゆえだろう。
メイド衣装に身を包んだ少女――十六夜咲夜はまさしく瀟洒な姿で走っている。
視線の先にはもう一人の少女。長い赤髪を振り乱しながら走っている。
武道でも修めているのか、走法自体は洗練されているものの、咲夜とは違い必死さが伝わってくる表情だった。
「待ちなさい、美鈴！」
咲夜に美鈴と呼ばれた先行く少女はびくっと一瞬肩を竦めたかとおもうと、更に走る速度を上げた。
紅魔館を舞台に鬼ごっこが繰り広げられている。
もちろん、純粋に遊戯としての鬼ごっこではない。
その証拠に逃げる美鈴の表情は険しく、こめかみには冷や汗が一筋。
「い～～やぁ～～！　つ、捕まったらおしおきがっ!!」
「おしおきされるようなことをしたのだから大人しく捕まりなさい」
「ひ、ひぃ……っ」
冷えた咲夜の声音に小さく悲鳴をあげ、またも美鈴の速度が上がった。
なびく赤髪がいっそう強くはためき、咲夜の視界いっぱいに赤い流れが広がる。
逃げきるための本能的な加速。肉食動物さながらのしなやかさで、ともすれば見惚れてしま

いそうなほど。なのにそれを生んでいるのは、メイドのおしおきから逃れるためというなんとも締まらない理由。

「くっ……まったく、こんなところで無駄にその才能を……！」

咲夜の口から愚痴が零れ落ちる。

追っている彼女も決して遅いわけではない。

ほっそりとした足が前へ前へと伸び、綺麗なフォームで美鈴の後をついていっている。その速度はとてもヒールの高い靴を履いているとは思えない。

服装も、動きやすそうなズボンを穿いている美鈴に対して、咲夜は短めなメイドスカートだ。速度を上げれば上げるほど腿にまとわりついてくる。

そこにきて美鈴の本気が出たのだ。

（さすがにこれじゃ追いつけないか……）

もともと肉体派であり妖怪でもある彼女が本気を出したのなら、人間である咲夜に追いつける道理はない。

ない、のだが――。

「逃げきれると思っているのかしら？」

呟く咲夜の声はあくまでも冷静だった。

「ちょ、咲夜さんまさか……」

「幻世――」

「えええええええええええ！　待った待った！　ただの追いかけあいでそれは卑きょ……」

「――ザ・ワールド」

咲夜が文言を唱えた瞬間、世界の一切が停止した。

走っていたはずの美鈴も、空気の流れさえも。

灰色に染まる異空の中を咲夜だけが動けている。

咲夜の持つ〈時を操る程度の能力〉によって普遍のはずの時間が止められていた。

離されかけた美鈴との距離がぐんぐん縮まってゆく。

それはそうだろう。相手は止まっていて、咲夜は動いている。先ほど美鈴が卑怯と言いかけたのも頷ける。これでは勝負が成り立たない。

もっとも、勝負という言葉を持ち出すのは何かを競う時だけだ。

（残念ながらこれは勝負ではなくて、おしおきなのよね）

ご愁傷様、と心の中で付け加え最後の距離を詰める。

残り三歩。

二歩。

一歩――――のところで、世界が反転した。

咲夜が「え？」と声ならぬ驚きを上げた時にはすでに眼前に床が迫っていた。

同時、驚きに集中が途切れたせいで時が動き出す。
べちーん。
動き出した世界で最初に響いたのは咲夜が盛大にこけた音だった。
「え、咲夜さん？」
「――――――っ」
背後でものすごい音が鳴り、慌てて急停止して振り返る美鈴。
視界に飛び込んできたのは咲夜が床に倒れこんでいる姿。それも普段の彼女からは想像もつかないような情けない倒れ方だった。
両手は前方に投げだし、スカートの裾は捲れている。曲げた足の片方からは靴が脱げていて、いっそう情けなさに拍車をかけている。
こつん。
と、転んだ拍子に宙を舞っていたのだろうパンプスが咲夜の頭に落ちてきた。
「う……痛そう……」
黒光りするエナメルのパンプスは咲夜の足下をいつもキリッと綺麗に彩っている。けれど、頭に落ちるなんて、なまじ硬そうなぶん相当痛むだろう。しかもつま先から落ちていた。
「っ！　～～～～!!」
「あ、やっぱり痛いんだ」

頭を押さえ、もがくようにビクビクとしている。
それから数秒。
転倒のショックと靴の痛みからやっと我に返った咲夜はゆっくりと立ち上がる。
パンパン、とエプロンをはたき、服装の乱れを正す。
表情はまるで何事もなかったかのように涼しげだ。
「何か問題でも？」
「い、いや、問題というか何というか……」
「何か見たのかしら？」
「強いて言えば咲夜さんの黒いぱん――うひゃあ！」
美鈴の頬をナイフが掠めて飛んでゆく。
「何　か　問　題　で　も　？」
「い、いえ！　何でもないです！」
「そう。それは結構ね。じゃあおしおきね」
「えええええ!?　何でもないって言ったのに！」
「あら、忘れたの？　もともとおしおきするために追いかけていたのよ？」
「あ……」
そういえばそうだったと美鈴は思いだし、急速に焦りが押し寄せてきた。

だらだらと額から汗を流し、瞳は激しく左右に揺れている。
「えっと、その―」と、きっと通用しないだろう言い訳を必死に探っている。
「観念なさい。見苦しいわよ」
「ひぃっ」
ずいっと咲夜が一歩踏み出す。この距離ではいかに美鈴といえど逃げ切れない。
悲鳴を上げ、固めたくもない覚悟を固めた。
「見苦しいのは貴女でしょう？　すごい音がしたわよ」
「お、お嬢様!?」
脇の扉が開き、中から現れたのはこの紅魔館の主であるレミリア・スカーレットだった。
驚きの声をあげた咲夜はさっと視線を左右に巡らし、内心でしまった、と声を上げた。
美鈴を追いかけることに夢中でよりにもよって自分の主――レミリアお嬢様の部屋の前まできてしまっていた。
こんなこと、普段ならしないような失態だった。
外を見れば窓から薄日が差し込んできている。夜明けが近い。つまり、レミリアの就寝時間だ。
吸血鬼である彼女は落日とともに起床し、夜明けに眠る。
寝入るところを先ほどの音で邪魔されたせいか、レミリアは不機嫌さを隠そうともしていない。
（回り込んで美鈴に進路を変えさせるとか何かあったでしょうに！　よりにもよってお嬢様が

寝るこの時間帯で失念するなんて）

いつもであれば意識せずともやっていることを出来ていなかった事実に咲夜自身ショックを受ける。自己嫌悪する。そしてそれ以上に恐怖した。

こんな失態、主からしたら何と思うだろうか。

「いえ、その。申し訳ありません。美鈴がお嬢様の大切にしてらしたカップを割ってしまったもので。ちょっとお灸をと思い、追いかけていたら……」

「あの冷たい目はちょっとっていうレベルじゃなかったと思います」

「黙りなさい」

「はいッ」

言い訳を並べるなんて——それも他人のせいにしようとするなんて、自分らしくない答え方をしてしまったことを咲夜は不思議に思う。思うものの、開いた口は止まらなかった。

「その、今日はどうかしていたみたいで」

こんな場所まで追いかけてきてしまったこと。無様にもすっ転んでしまったこと。そして言い訳を並べ立てていること。そのどれもが自分らしくない。

そう思いながらも言葉を並べていた時だった。レミリアから出てきた言葉は——

「今日に始まったことではないでしょう？　昨日は洗濯物を飛ばして汚す。一昨日は何の嫌がらせだったのか知らないけれどニンニク料理のフルコースを出してくる。その前は何だったか

しら……あぁ、その日は咲夜こそカップを割っていたのでは無かったかしら？」

「っ……その……。はい、申し訳ありません」

申し訳ありません、と。本当に何度もそう言うしかなかった。

思い返せば最近は何をやってもうまくいってなかった。そんなことも頭からすっぽ抜けてしまうほど重傷だったということに今更気付くなんて。

こんな状態ではだめだ。心機一転して、初心に返って、誠心誠意お嬢様にお仕えしよう。

「お嬢様、あの――」

「咲夜」

「は、はい」

許されるかはわからないけれど、固めた決意を口にしようとした時、咲夜の言葉を遮ってレミリアが問い掛けた。

（また言い訳でもすると思われてしまったかしら。そんなつもりは無かったのだけど、そう思われても仕方がないわよね……）

不本意だけれど自分が招いたミスなのだから、と粛々と返事をした。

返事をした時はまだ、心のどこかで深刻に捉えていなかったのかもしれない。

咲夜の仕事ぶりは真面目で、性格も同様であるし、頭も切れるのは疑うべくもないのだが、この時ばかりは見通しが甘かったのだろう。

いや、見通せるほどの視野を持っていなかった。
それほどまでに咲夜の精神状況は悪かったのだ。
だから。
続くレミリアの言葉に彼女の心は砕かれた。

「貴女、ちょっと屋敷を離れなさいな」

咲夜の理解出来ぬ言葉が頭蓋を直撃した。
けれど、自らの主の言葉ゆえだろうか。言葉は耳から耳へと抜け出ず、頭の中でわだかまる。
ぐるぐると巡る言葉はとぐろを巻く蛇だった。
その螺旋が何周した頃だろうか。ようやく衝撃が収まり、咲夜に思考する力が戻り始めた。
結果的には、戻らない方が幸せだったのかもしれない。

『貴女ちょっと、屋敷を離れなさいな』
『貴女ちょっと、屋敷を離れなさいな』
『貴女ちょっと、屋敷を離れなさいな』

今度は意味の通った言葉が何度も脳内を反響した。
知りたくもない意味が、嫌味なほどにその存在を刻みつけてくる。
――屋敷を離れろ？
――ここを出ていけ？
――私は、いらない？
跳ね返る言葉はまるで粘土。
ぶつかる度に言葉の形を変え、意味を歪（いびつ）に変化させてゆく。
原型も留めぬ程に形が変わった頃には言葉は失速し、咲夜の頭の中に間違った形で着地した。

自分はもう、ここには居られない。

あるいは、その結論に至るのは必然だったのかもしれない。
だからこそレミリアはその言葉を選んだのかもしれない。
青ざめながらも咲夜は律儀にお辞儀をした。
震える声で別れを告げる。ぎゅっと握ったこぶしに力を込めて。

「お世話に、なりました」

◇

「良かったのですか？　レミリアお嬢様」
「何が、かしら」
「あの様子だときっと勘違いしてると思いますけど……」
問いかけた美鈴の言葉は尻すぼみに消えてゆく。
納得出来ない、という気持ちが美鈴の言動の端々からにじみ出ているものの、館の主に対して意見出来るはずもなく。結果的に子供が親の機嫌を窺うような、中途半端な意思表示になってしまっていた。
美鈴も最近の咲夜はどこかおかしいと感じていた。それでもあまり気にしていなかったものの、だからこそだろうか。先ほどの自分の行動が咲夜を紅魔館から追い出す引き金になってしまったのではないかと、引け目を感じてしまっている部分もある。
「あの子は――」
「……？」
美鈴の心中を察したわけでもないのだろうが、レミリアの言葉が沈みかけた気持ちにストップをかけた。
「きっと大丈夫よ」

「それは……そういう運命なのですか？」
「いいえ。これはあの子の運命よ。私は何もしていない。できるわけないじゃない。あんなにも痛ましい咲夜を、どうにかできるわけがないわ」
「でも、お嬢様のお力なら運命を変えることもできるのでは――」
「できないわ」
美鈴の言葉を遮る。
それだけは譲れないことなのだと、強い語気が物語っていた。
レミリアが備える〈運命を操る程度の能力〉。万能ではないにしろ、確かにその力があれば人の境遇や気持ちなどある程度は操れるのかもしれない。
だが――
「あんなにも大切にしている気持ちを、私のおせっかいで歪めることなんて――できるはずないじゃない」
「お嬢様……」
「見ていて辛いけれど、咲夜はもっと辛いのだろうけれど。だからといって、歪めたり、無かったことにしたり……きっとそんなことをしてはいけない気持ちなのだと思うわ。私だって、大切な想いを知らぬ間に誰かにいじくり回されていたらいい気はしないもの。恐らくこれは、人も妖怪も神様も、変わらないことだろうから」

「そう……ですね」

二人は窓外に視線を移す。

門前でしばらく佇んでいた少女がとぼとぼと歩き出したところだった。

最後に一礼した後は振り返らない。

それはなんとも彼女らしい振る舞いではあったけれど、どこか頑なに現実を否定しているようにも見えて、少しばかり二人の胸にチクリとした痛みを残した。

「ちゃんと、戻ってらっしゃいな」

「咲夜さんならきっと大丈夫、ですよね」

「そうね。きっと……ううん、絶対に大丈夫。それに、戻ってきてもらわないとこっちが困るわ。今日から炊事掃除洗濯をやるのが美鈴になるんだもの。きっとめちゃくちゃよ」

「しばらく咲夜さんに逢えなくなるなんて寂しいですけれど――って、えええええええええ!?わ、私がやるんですか!?」

「他に一体誰がやると言うのよ」

「えっと、パチュリー様……は体調的に無理か。あの、小悪魔さんとか妖精メイドとか……」

「小悪魔はパチュリー付きであって私付きではないから頼めないわよ。それに妖精メイドがきちんと仕事するとでも思っているの？」

「あ、あはは―……咲夜さんの肩代わりはきつそうですね……」

「そういうことだから。頑張ってね、美鈴？」
「咲夜さーん！　早く帰ってきて下さいね――！」
美鈴の悲哀な言葉はもちろん咲夜に届くはずもなく、紅魔館の長い廊下に消えていった。

この日より数ヶ月。
十六夜咲夜の、長い長い冬越えが始まろうとしていた――。

第一話　貴女のところでメイドをするわ

一　咲夜の憂鬱

グラスの曲面に映った自分の顔を見ながら、咲夜は溜息をついた。

「はぁ……ひどい顔ね」

グラスに映る顔は横に引き延ばされて確かにへんてこな顔つきにはなっているけれど、ひどいのは造形ではなく精彩。グラス越しでありながらも、今の自分が生気に欠けているのがありありとわかる。

「どうして紅魔館を追い出されたのか……」

出て行けと言われた後はしばらく考えを巡らせることもできず、生きた屍のようにふらふらと紅魔館を後にしたけれど、ようやく過去を振り返れる程度には冷静さが戻ってきたらしい。

「答えは簡単。私が無能だったから」

そういうことなんだろう、と咲夜はアタリをつける。

本当に最近は失敗ばかりでお嬢様に迷惑をかけていた。これならば呆れられても文句は言えないだろう。

思い返しただけで鉛のような気持ちが湧いてきて、もやもやとした気分を強引に嚥下するようにグラスの底に残った液体をぐいっと飲み干した。

「……渋いわね。次は違うのでも頼もうかしら」

飲み干した葡萄酒のグラスを指でチンと弾きながら呟く。

（もうちょっと弱ければ楽だったのに）

一向に酔いが回ってこない自分の体質を恨む。まぁ、普段から飲み慣れている葡萄酒を頼んだのも間違いだったのか、とも思う。しかも紅魔館で飲んでいたものに比べれば味も香りも格段に落ちる。これに頼ったところで嫌な気分を忘れたりできるはずもない。

「すみません。えーっと――……同じ物、下さいな」

そう思いつつも、結局冒険する気にもなれず同じ物を頼んだ。「何やってるんだか」と自分自身に突っ込んでしまう。

（安定を取って一歩を踏み出さないのは悪い癖？　それとこれとは違うか。もっと高いお酒ならそれなりに美味しいのでしょうけど、こんなことであんまり散財してもね）

紅魔館を出るときにレミリアから結構な金額を持たされたおかげで当面の生活には困らない。退職金か、はたまた手切れ金か。

無休無給で働いていた咲夜にとって、私財が増えたのはいつぶりだっただろうか。レミリアと出逢う前まで遡ることは間違いないのだけれど、昔のことはあまり考えないようにしている。

ともあれ、突然降って湧いたお金を持て余し、どうしたものかと思っていた。
紅魔館を出た後、特に何も考えず足の向くままに訪れたのは人里。
そういえば普通は嫌なことがあったらお酒を飲むという話を思い出し、目に付いた酒場に入ってみたはいいものの。
（自棄酒というのは酔う人でなければ意味がないわけね）
注文してすぐにきた酒を飲みながらぼんやりと「結果は失敗に終わりそう」と感じていた。
この一杯を飲み終わったら出ようと考えながら辺りを見回す。
馴染みのない場所だからか、見慣れないものもあり、視線を走らせるだけでいくらか気分は紛れる。
と、店内を見回していたときだった。
「あら……？　あの子……どこかで……」
目を惹いたのは二つ先のテーブルに座っている客。短く揃えた金髪が印象的な少女だった。
少女は机に突っ伏していて、座っていると言っていいのか微妙なところではあるが、手元でグラスをころころといじり回しているところを見ると酔い潰れて寝ているわけではないらしい。
ひとのことを言えた義理ではなかったが、少女一人でこのような店にいるのがひどく目立っていた。ただ、それ以上になんとなくその姿に見覚えがあったのだ。
霞がかかったような、朧気な記憶を探る。あの少女は誰だったか。いつ、どこで見たのだろうか。

記憶の底を攫うも、なかなか思い出すことができない。すぐそこまで出かかっている気がするのに。

頭を悩ませていると気のせいかほんのりと頬が熱くなってきた気がした。

「悪酔いしたかしら……」

酔わないと思っていた矢先にこれだ。どうもこの安酒はあまり自分の体に馴染まないらしい、と咲夜はため息をつく。

これ以上頭を痛くしてどうするのかと。

ただでさえ当分は消化し切れないだろう悩みを抱えてしまったというのに。今は少しぼうっとするだけだが、このまま飲み続ければ本当に体調を崩しそうだったので早々に切り上げようと思った。

（あの子のことも引っかかったけど……思い出せないんじゃあね）

見切りをつけて席を立とうとした時、なにやら呻き声のようなものが聞こえてきた。

「――りさ……」

「えっ……？」

「ま……り――」

（あの子、今何て）

聞こえていたはずなのにうまく頭に入ってこない。それでも少女が発した言葉――ある単語

を追い求めてしまう心がある。無意識に抱いた「もう一度」という咲夜の願い通り、少女は先ほどまでよりもやはっきりとした声で言った。

「魔理沙……」

「ま、りさ……？」

そう、確かに少女は魔理沙と言った。

魔理沙――。

霧雨魔理沙。

その名前を呟いた瞬間、咲夜の胸に不可視のナイフが刺さった。ずきんずきんと、鋭い痛みを発しながら正体不明の刺激は頭の奥にまで響いてくる。

「……っつ」

悪酔いとは違う刺激を知覚し、呻き声をあげる。

「な、に……」

咲夜自身わけもわからず、胸を内側から押し上げるような圧迫感にただ耐えるしかなかった。

そうしておとずれたのは安息ではなく、あの日の記憶だった。

痛みと共に想起された記憶。

霧雨魔理沙の、葬儀の日――。

二　葬儀

その日は、空に蓋をしたような、奇妙な圧迫感を覚える日だった。
実際、頭上には分厚く立ちこめる雲が広がり、今にも雨が降りそうな気配を滲ませている。
ぐずついた空模様に比べ、地上では既に泣き出している者がそこかしこにいた。
ぐす、ぐす、と鼻をすする音。譫言（うわごと）のように聞き取りづらい言葉を吐いている者。共通しているのは皆が醸（かも）し出す雰囲気。
ぽつぽつと何かしらの音は聞こえてくるものの、場に満ちる印象は静寂だった。一様にしんみりと、しめやかな空気が辺りを支配している。
――葬儀の席だった。
曇天にも負けぬほど黒い装束の人々が集まり、悲しみに暮れている。
集まった人々の中を、ひとつの箱が通り抜けてゆく。
皆、悲しみに暮れているはずなのにするすると左右に分かれ、律儀に通り道を作った。
この場にいる誰もがその死を認めたくないはずなのに、否定もせずに粛々と儀式めいた仕来（しきた）りに則っている。
咲夜は少し離れた位置から自分でも不思議なほど冷静にその光景を眺めていた。
（みんな、なんでそんなに物わかりがいいのかしら）

咲夜ももう彼女が生き返らないことくらいは解っている。死んだ命は戻らない。それは神様が存在する幻想郷でも同じだ。

それでも、もっと感情のままに行動する者のひとりやふたりいてもいいのではないだろうか？

誰もが死を受け入れていて、従順で、無力で、それも仕方がないと諦めているように見えて、咲夜は胸中で煮え切らぬ思いを抱いてしまう。

名状も形容も出来ない感情。

――この気持ちは、何だろう？

答えを見つけられずに葬儀の進行を見守っていると、咲夜の少し前が僅かにざわめいた。棺が通るところだった。

霧雨魔理沙を入れた、棺――。

前方にいる人々のすすり泣きのトーンがひとつ上がった。

込み上げた感情が溢れたのか、表情も大きく変化した。

沈鬱な表情、涙でくしゃくしゃになった顔、感情が極まりすぎて呆然としている者。どれも魔理沙の死を悼む気持ちからきていて、その総てが心の底から湧いたものであるのはひと目でわかる。

周囲の様子を見て、咲夜は今そんなことに意識を割いている自分の方がよっぽど場違いなの

だろうと思い直した。冷たい人間なのではないか、とすら思う。
　友人の遺体が運ばれてゆく光景を見ながら、悼むより周囲の光景の方が気になってしまうなんて。
　身体の内に宿る、この震えるような気持ちは悲しみだ。それは間違いない。けれども、周囲の人のあまりの悲しみようを見て、逆に心が一歩引いた位置に来てしまったようにも思われた。
　軽い自己嫌悪を抱きながらも、せめて最期はと棺の行く末を追う。
　と、ちょうど視線を前方に遣った時。
　一人だけ列から一歩踏み出して棺に手を伸ばしている者がいた。
「魔理、沙……。……、っ……」
　ぐす、ぐす、とすすり泣いている。何度も何度も、魔理沙、魔理沙と。
　葬儀の仕来り。その例に洩れず羽織ったケープからスカートまで黒一色の服装。
　そして何より特徴的な短く揃えたくすみのない金髪。悲しみに暮れているものの、整った容姿はまるで人形のよう。
　けれども、ただの人形ではない。
　纏った悲哀が少女を儚げな存在にしている。触れただけで壊れるのではと心配になる、硝子人形。
（でも、彼女は人形なんかじゃない。彼女の頬には涙が流れている）

冷たい硝子人形ではなく、体温を持った人。
温かいということは生きていること。
生きて、感情があるから、ああして涙を流している。
（あんなにも泣いてくれる女性がいるなんて、魔理沙は幸せ者だったのかしら。泣けない女なんかより、よっぽど仲が良かったんでしょうね……）
彼女は魔理沙とどんな風に接し、どんな日々を過ごし、そしてどんな思い出を胸にしまっているのだろう。
それを想像しようとして、しかし咲夜はすぐにやめた。
（人様の関係を勝手に推測するのも失礼よね）
そうやって言い聞かす。
失礼な事だと思ったのは確かだけれど、それ以上に何か強い力が想像することを引き留めた。
――その先はイケナイ。
――知ってはイケナイ。
言葉に似た何か。理性とも違う何か。咲夜は無意識の内にその感覚に従っていた。そうして理由付けをしていた。
他人の過去を探るのは失礼だと。
だから、咲夜はただ黙って見ているしか出来ない。魔理沙を入れた棺と、縋りつく少女を。

どんなに仲が良かったにしても、彼女と魔理沙――二人の間にあるのはただの木の板一枚だけれど、その差はもう、決して埋まることはない。

（彼女と魔理沙。私と魔理沙。生前と死後で、この距離はどれほど変わるのかしら……。私と彼女の差はどれだけ――）

遠い空で雷がごろごろと呻いた。

腹の底に響く音に引き戻され、なんとはなしにひと雨きそうだと思った矢先、すぐにぽつぽつと雨粒が落ちてきた。

雨脚はすぐに強くなった。嘆いていたはずの人々は急に気もそぞろになり、あちらこちらで「そろそろ……」と言い出している。

人ひとりの死より濡れないことの方がそんなに大事なのだろうか。そんなことで別れは充分なのだろうか。

天でさえ、魔理沙の死に対してこんなにも泣いているというのに。その涙に濡れるのがそんなに嫌なのだろうか。

なぜ自分はこんなにも心が乱れているのか、咲夜にもわからない。わからないけれど、きっとこれはここにきてやっと友人の死を真剣に悼むことができたからだろう。

目の前の、金髪の少女のように。

少女は雨にも負けず泣いている。

あれほど強くは泣けないけれど、自分も悲しんでいるのだと。
そんな風に自分と比較してしまう金髪の少女が、ひどく印象的だった。

三　出逢い

「あの時の……」
思い出した記憶と目の前の光景が重なり、咲夜は僅かに目を見開く。
「魔理沙……、うぅ……。どう、して……」
正しくあの日の焼き増しというわけではないが、嘆き、悲しんでる姿はあの日と変わりない。
少女の中では未だ大きな傷跡のままじゅくじゅくと膿んでいるようだった。
（あれから何日も経っているけれど、あの子の中の時間は止まったままなのね……）
魔理沙が死んだことを信じられず、進むことも退くこともできずに囚われているのだろう。
見ているだけで辛い光景ではあったけれど、咲夜はなかなか目を離すことができなかった。
しばらくぼうっと見ていると、唐突に臥せっていた少女が動き出した。
がばっと顔を上げたかと思うと、妙に座った目で左右を見回す。
（な、何？）
一瞬、見ていたことに気付かれ、何か言われるのかと思ったがどうやらそうではないらしい。

本来であればそこで見るのを止めていただろう。これが何でもない見知らぬ相手であれば。

だから、きっかけが出来たのだ。

少女は立ち上がり、歩きだそうとした。お手洗いでも行くのかしら、と思った瞬間。

少女の体が傾いた。バランスを崩し、テーブルに手をついて支えようとする。酔っているのか。目測を謝ったのか。出した手は空回り、前のめりに倒れる。

「ちょっと――ッ」

咲夜は反射的に動き出していた。けれども、すぐ近くとはいえ間に合う距離ではない。

咲夜が滑り出すように椅子から身を乗り出し、一歩床を蹴った瞬間には少女の身体は既に床と平行になるところだった。

「ま、に、あ――」

時が止まる。

少女が倒れるまでの数瞬が無限に引き延ばされた。

その間に少女の身体を掬うように手を差し入れ、抱きとめる。

「――った！」

時が動き出す。

ふわり、と咲夜のスカートが翻る。
急激な加速と制動が僅かな風を生んでいた。
「あ、れ……？　んん、なんだか良い匂い」
「あのね……第一声がそれ？」
「え、え？　あなたは……」
必死に抱き止めた少女は自身が倒れそうになっていたことにも気づいていない。
それどころか、風に乗って漂う咲夜の香りに少しうっとりっしている。
「なんだかあんまり嗅いだことない匂いだけど……何かの香水？」
「まぁ……香水はつけているけれど」
やはり少女は酔っているのか、どうも会話のピントがズレている。
「ねぇ、それよりそろそろ自分の足で立って下さらない？　いい加減重いのだけど」
「あのねぇ。重いは失礼じゃない？　これでも一応体重は気にして一定に保っているんだけど」
「あぁー、はいはい。わかったから。とりあえず降りて」
「むぅ。わかってない！　お肉が付きやすい体質の子が体型維持するのがどれだけ大変か、あなたわかってない！」
「んもう。酔っぱらいは面倒ねぇ。……ごめんなさい。重いと言ったのは謝るから、だから――」
「あなた、細いわね」

そう言って少女は抱えられたまま、おもむろに咲夜の腰周りをすりすりと撫で始めた。
「ちょ、ちょっと。やめ、なさいってば……」
「むむぅ……いかにも『私、太らない体質なのよね』っていう体つき……」
「そんなっ、わけ……ちょっと、……だめ、あぁっ」
少女は咲夜の体型をチェックするように触っている。本人にその気はまったくないのだろうが、その行為はくすぐっているようなものだった。
「ちょっ、……もう、だめ――」
弱いわき腹をつんつんとつつかれた瞬間、咲夜は耐えきれず少女を抱えたまま床に崩れ落ちた。
少女二人分の衝撃が辺りを伝い、がしゃがしゃとテーブルの上の食器類が音を立てる。
「いったーぁい」
「い、っつ……」
背中から落ちた少女は腰をさすり、被さるように転んだ咲夜は打ったおでこを少し涙目になりながらさすっている。
「あのね、『いったーぁい』じゃないでしょう。止めなさいと言ったわよね!?」
「そうだったっけ？　ていうか、何で転んでるの？」
「……はぁ、頭痛いわ……」
「大丈夫？　飲み過ぎは良くないわよ？」

「貴女に言われたくない……」

盛大なため息をつきながら「どうして助けようなんて思ったのかしら」と呟く。実際には思うよりも先に体が動いていたのだけれど。

「えぇーっと、そういえばなんだかふらついてたようなしてないような……」

「してたのよ。せっかく倒れる前に支えられたのに台無しじゃないの」

「あぁ。そうだったの……それはなんというか、かわいそうに」

「……貴女、もうそろそろ帰った方がいいんじゃないの？　だいぶ酔っているようだし、足下ふらふらなんだから。外ももう暗いわよ」

言われた少女はゆっくりと窓の方を見た。窓越しに見える四角い空は確かに帳（とばり）が降りていた。

星が、瞬いている。

夜空を眺め、一筋の涙が少女の頬を伝っていた。

「……ら、ない」

「え？」

少女が小さく呟く。力無い言葉に咲夜は聞き返した。

「なに？　何か言った？」

「帰らない」

「え、帰らないって……」

「帰らない。帰らない。帰りたくない」
「いや、そりゃあ帰る帰らないは確かに貴女の自由だけれど、このお店もいつまでもやってるわけでもないのだし。家はこの近くなの？」
「魔法の森」
「はぁ？　そんな遠くなの？　だったらなおさらもう帰らないとじゃない」
「んー。……そうねぇ……」
返事をする少女はやはり帰ることに乗り気ではないようで、どこか煮え切らない。
「というか、魔法の森に今から帰るんじゃかえって危ないか」
「んんー？　一応これでも魔法使いだから大丈夫よ。きっと」
「そうなの？」と驚きを返す咲夜に見せつけるように「ふふー」と緩んだ笑顔を向けてくる。
見てなさい、と言った少女の身体がふわりと宙に浮く。
「本当だわ。これならまぁ、大丈夫かしら」
「あ、あれ……？」
咲夜がほっと安堵したのも束の間、少女の浮いた身体が揺れ始めた。
「あ、あらら。ちょっと……あれ」
動揺の声を漏らす少女に咲夜は嫌な汗が伝う。
そして——

「わわっ、ちょ。避けてあなた――」
がしゃーん、と。本日二度目の衝撃が店内を襲った。

夜の冷たい風が二人の身体を撫でてゆく。
天頂にはいくつもの星々が煌(きら)めき、漆黒の帆布(キャンバス)を彩っている。
「さすがにこの時間帯の空は寒いわね……」
「ううー、冷える」
咲夜の背中に負ぶさり一緒に飛行している少女は、寒さから逃げるように縮こまり、羽織ったケープをさらにぎゅっと引き寄せる。それでもまだ足りぬと、咲夜のマフラーをひっぺがして自らに巻こうとする。
「ちょっと、私のマフラー取らないでよ。もっと寒くなるでしょ」
「ううん、だってわたし、冷え性だから」
「知らないわよ。だったら普段から厚着するかもっと早く帰れば良かったでしょ」
「冷たいわね、あなた」
「冷たいのは今夜の風よ。私じゃないわ」
取られそうになったマフラーを器用に奪い返し、きっちりと首に巻き直す。

結局、空を飛ぶことにも失敗するほど泥酔していた少女をそのまま放っておけず、咲夜が送っていくことになった。

「空も飛べない魔法使いなんて……」

呆れたように言葉を漏らす。そして、

（どうしてこんなにお節介を焼いてるのかしら）

自分自身、不思議なほどこの少女を気にかけている。

悪い子ではないようだし、いくら魔法使いとはいえ、ふらふらな状態では確かに不安が残る。

けれど、真に気にかける理由はそこではないのだろう。

魔理沙のことを想って泣いていた少女――。

どうしても、放っておけなかった。

（まぁ、暇だしね）

いつもならば、それでもここまでのお節介はしなかったかもしれない。

だが、今は急ぐ理由も帰るべき家もない。

（だったら、普段と違うこんな行動をしてしまうのもあながち不思議じゃない、わよね？）

自分自身に問いかけるように。確認するように。自分はどこもおかしくないと。

「ねえ」

「――、なに？」

いつの間にか内へ没入していた意識を、少女の声が呼び戻した。
「あなた、名前何て言うの？」
「あぁ、そういえば名乗ってなかったわね。十六夜咲夜というの」
「いざよいさくや……」
「月の十六夜に、花が咲くの咲くに夜。名字は長いから咲夜と呼ばれることがほとんどね」
「サクヤ……」
「えぇ。呼ぶ時はそれでいいわ」
「……あ。咲夜！」
「え。な、なによ……？」
「あなたが咲夜だったの！」
「そうだけれど？」
何かに気づいたように少女は声をあげる。どうも咲夜の事を知っているような口振りだった。
「よく話で聞いていたのよ、あなたのこと」
「そうなの？　誰か共通の友人でもいたかしら。あまり人里には来ないし、ましてや魔法の森なんて行かないから知り合いは少ない方だと思うのだけど」
「……あの、……魔理沙に、ね」
「そう」

束の間忘れていた魔理沙の存在を思いだし、少女は何とも言えない雰囲気を纏う。
「貴女は？」
「え？」
そんな雰囲気を察したのか、そうでないのか。ごくごく自然な口調で咲夜は聞いていた。
「貴女の名前は？　私にだけ名乗らせておくつもり？」
「あっ……。そうね。私も言ってなかったか」
沈みかけた雰囲気を強引に変えてきた咲夜を見る。負ぶさった状態からでは後頭部しか見えないけれど、少女はきゅっと少し捕まる腕に力を込める。
「……アリス。アリス・マーガトロイド」
「アリス」
「うん。聞いたこと、ある？」
「そうね。……魔理沙が良く出してた名前だわ」
「そ……」
お互いに直接的な繋がりはなくとも、名前は知っていた。魔理沙を介して。妙な縁もあったものだと思いながらしばし無言で飛行する。
幻想郷の夜空を二人の少女が泳いでゆく。
円い月に照らされた咲夜の銀髪とアリスの金髪が長く尾を曳いている。

大自然の帆布にふた筆の軌跡が描かれる。それはまるで双子の彗星のようだった。
金銀の光は絡みあい、儚げな光となって。光は、魔法の森めがけて飛んでゆく。
「ありがとうね」
「何がかしら」
不意にアリスがお礼を言った。
「気を使ってくれたんでしょ」
「別に、そんなんじゃないわ」
「酔っててもそれくらいわかるのー」
アリスが更に力を込めて抱きついてくる。
「あったかぁい」
「ちょ、やめてってば。臭い。息が酒臭い」
「んふふー。やぁめない」
「……はぁ。本当に、どうしてこんなことに」
囁く咲夜だったけれど、マフラーに隠れた口元は少しだけ緩く弧を描いていた。

「ここよ」と言って降り立ったアリスが右手で自分の家を指し示した。

魔法の森の中にぽつんと建った小さな家。
特に変わった外見をしているわけではないのが咲夜には少しだけ意外だった。
「魔法使いの家ってもっと奇抜な形してるのかと思ってたわ」
「あのねぇ……魔法使いにどんなイメージ持ってるのよ」
「奇人変人の類かしら。大樹の中に家があったりとか。あと中は実験器具でごちゃごちゃとか」
「そんなわけないでしょう？　これでも一応、元人間なんだから」
魔法使いは二種類いる。種族としての魔法使いと、職業としての魔法使い。
人間が魔法使いを名乗る場合、後者だ。魔理沙もそうだった。それに比べて前者――種族としてというのは、人間という鎖から解き放たれた存在だ。一定の技法を手に入れ、人間としての生活をせずとも生きられるようになり、種族そのものが魔法を追い求めるのに特化した存在。
どうやらアリスはこちらの方らしい。
「お茶くらい飲んで行く？　身体、冷えたんじゃない？」
「ありがたいけれど、でも、そろそろ宿を見つけないとだからあまり長居もしてられないのよ」
「え。どっか泊まるつもりだったの？」
「ちょっとあってね……」
「なんなら一晩くらい泊まっていく？　これから里に戻るのも時間かかるでしょうし」
「あー、遠慮しておくわ。最近自分の役立たずっぷりにへこんでしまってね。自活でもしようと

思っていたから。ていうか、知り合ったばかりの人間捉まえて『泊まっていく？』ってどうなの」
「変なのかな。私はあんまり気にしないんだけど。ま、無理にとは言わないわ」
アリスに応えた言葉は考えていたことではなかった。とっさに口から出た出任せみたいなものだったが、言った後からそうするしかないのかもしれないと思った。
自分が使えないから紅魔館を追い出されたのなら、使える人間にならなければという意識が芽生える。
その後になって紅魔館に戻れるのか、戻る気が出るのかはわからないけれど。
「とりあえず送ってもらった手前、お礼をしないと気が済まないの。ササっと準備しちゃうからお願いだから嫌じゃなければお茶くらいは振る舞わせてちょうだい」
「そこまで言うなら……それでアリスの気が済むのならいいわ。ま、宿のこともあるにはあるけど、もともと急ぎでもないわけだし」
「そ？　良かった。じゃあ入って」
そう言ってアリスは扉を開けた。
玄関口からすぐ部屋に通じているらしく、中の様子が見て取れた。
「あ……」
「え……」
気まずそうな声と驚きの声が重なった。

「えーっとぉ……ちょぉーっとだけ待っててもらえたり、とか……？」

酔いの吹き飛んだアリスが苦笑いをしながら咲夜に弁明しようとする。

「ふぅん。ごちゃごちゃな魔法使いのイメージを否定したの、誰だったかしら」

「いや、その。誰、だっけ？」

「『これでも一応、元人間なんだから』」

「あはは一、誰の物まねかしらねぇー……はは」

「はぁ……」

覗き見えたアリスの家の中はぐちゃぐちゃだった。実験器具だけでなく、食器類やゴミ、衣類が山と詰まれている。すぐ目の前の玄関でさえ、いくつものブーツが散乱している状態なのだ。

あはは、と乾いた笑いがずっと漏れている。

そんな光景を眺めていたら、なんだか急におかしくなって咲夜はぶっと吹き出してしまった。

「な、何よ」

なぜか少しふてくされたようにアリスが問いかける。

「いえ、なんだかギャップがすごいなって。アリスってば一見大人しくて真面目そうなのに、酔いつぶれるわ部屋は汚いわで」

「わ、悪かったわね。どうせ私はずぼらよ」

「ぷっ、あはは。そんな拗ねないの」

自分でも驚くほど咲夜は笑っていた。心の底から、おかしくてたまらないといったように。
（こんなに笑ったの、どれくらいぶりかしら）
魔理沙の死を知って以降は笑っていなかった気がする。それより前――普通に紅魔館で働いていたときでさえ、くすりとすることくらいはあったかもしれないが、ここまでお腹が痛くなるほど笑ったことはなかっただろう。
「ねぇ、アリス」
「なに？」
そうか。これしかないんだ。
「お茶だけって言ったけれど」
帰ることがあるのかはわからない。わからない、けれど。
でも自分の性分を変えることは難しい。きっとそれが自分にとって自然なことだから。
「私ね」
それに、アリスの寂しげな顔。あれが頭に張り付いて離れない。つい心配してしまう。ここを離れてからも不安だけは離れず残ってしまいそうだ。
だったら――
「貴女のところでメイドをするわ」